

なぜ言語でこの個物を語れるのか

はじめに

言語はどの口にも鸚鵡返し可能であるにもかかわらず、なぜ言語によってこの赤さやこのコップといった知覚上や思い上のトークンを語ることができるのか。言語はその鸚鵡返し可能性ゆえに、知覚されたり思われたりしている特定のトークンと結びつくことができないように思われる。すなわち、「赤さ」と言えば今私が知覚しているこの赤さではなくて、赤さ一般のことを指してしまうのではないか。本稿では「赤さ」という概念によってなぜ特定のトークンを指せていることにされるのかを論ずる。その際に参照されるのが大森莊蔵の重ね描き論である。大森は知覚と科学的世界像とをいかにして調停するかという仕方で重ね描き論を論じたが、本稿では重ね描き論は「赤い」という概念がいかにしてこの赤さを描けるのかといった言語哲学上の問題の一形態として見るべ

きだと考える。

ところが、大森自身はなぜ言語をこの知覚風景に重ね描きできるかを十分には論じてこなかった。端的なこの今が不在である言語的描写をこの知覚風景に接地するためには、両者を媒介する自由がさらに重ね描きされなければならない。この自由とは「現実に関動させる唯一の口」を動かす自由のことであり、この自由によって私が喋っているのがどの台詞なのかを選び出し、その台詞の中で言表される「これ」を現実のこれへと接地させるのである。

第一節 辞書の中の「今」はどの今のこともない

言語によってなぜ知覚上や思い上の特定のトークンについて語ることができるのだろうか。これが本稿でこれから論ずる問題なのだが、そもそもなぜ言語で特定のトークンを語ることが不合理であるように見えるのかをまずは説明する必要

入 角 晃太郎

がある。トークンとは「目の前のこのコップ」や「私が参加したあの成人式」といった特定の個物や出来事のことであり、一般物としてのコップや成人式のことを指すタイプとは対置される概念である。一方で、言語は言語である以上どの口によっても鸚鵡返し可能であり、私にしか出せない音声は言語であるとは呼ばれない。そこで私は、この私が今この瞬間にしか出せない音声である特定の事物を語るということではなく、何を語るにもいつでも誰にでも鸚鵡返し可能な言語によって語るしかない。しかしそうだとすれば、私が「コップ」と言つてまさに今見ているこのコップを語ろうとしても、「コップ」という鸚鵡返し可能な概念がこのコップとだけ関係を持つということなど不可能である。また実際、「コップ」という概念が目の前のこのコップと完全に癒着してしまつても困るのだ。というのも、「コップ」という語が目の前のこのコップ、しか言い表さないようであれば、それがコップという食器の一例でもあるという意味が脱落してしまうからである。しかし、言語から一般的使用を一切無くしてしまうならば、語はその都度一度きりの意味しか表さないことになるため、それは唸り声と変わらなくなってしまうだろう。したがって鸚鵡返し可能性は言語にとって本質的な特性なのである。そうであるからこそ、なぜ言語が特定のトークンを語ることが可能なのかという問いが重要となってくるのだ。

私は普段、今知覚しているこのコップに「コップ」という言語的描写を重ね描いている。ところが、鸚鵡返し可能な言語をトークンに重ね描くのは一見して背理である。にもか

わらず、トークンの言語による描写は現になされているように思われる。それはいかにして可能なのか。こうした問題意識のもとで、以下では大森莊蔵による重ね描き論を概観することにした。大森自身は本稿の問題に自覚的ではなかったようだが、彼の提唱した重ね描き論は本稿の関心に大きく関わるものとして読むことができるからである。

今、私の目の前にコップが見えているのだとしよう。うまくピントが合わない場合、目の前のコップはぼやけて見える。このとき、物体としてのコップそのものがぼやけたわけではなく、あくまでコップの見え方が変化したにすぎない。このことから、私は実物のコップとは別の知覚像としてのコップを見ていたことがわかる。ここで言う「実物のコップ」とは私の知覚の原因としてのコップを指している。実物のコップから反射された光が私の網膜に入った結果としてコップの知覚像が現れるのである。こうした図式に則れば、私に今見えているコップは実物のコップではなく知覚像としてのコップだということになる。しかしそうだとすると、その知覚を生じさせた実物のコップは一体どこに存在するのだろうか。コップが見えているところに実物のコップがあるとするのが一見常識的な答えだが、実はそれはテレビのモニターに映ったコップをモニター上にあると言うのと同じくらい転倒した論理である¹⁾。では、見えている場所にないのならば実物の「正しい位置」は一体どこだとと言えるのか。実物と知覚像はそもそも「実物は知覚像から一メートル南にある」といった言い方で言えるような位置関係を持つことができるのだら

うか。だが、知覚像と位置関係を持たないとすると、実物はこの知覚状況から隔絶されていることになってしまう。実物としてのコップは知覚の現場から孤立した状態にあると言わなければならない。

大森は、色や音に満ち溢れた知覚的な描像と、知覚の原因である原子集団を扱う科学的な描写とを同じ一つの風景からそれぞれ「抜き描き」したものであるとして、知覚的な描写と科学的な描写を一元的に取り扱おうとする。大森は知覚とは別種の様式として「考え」「思う」という様式を認め、近代科学もまたそこに含まれているとするが、大森によれば知覚することと考えることは様式こそ異なるものの、同じ一つの風景の描写であるという点において等しいのである。

本箱は見えると共に「考え」られているのである。同じ一つの本箱が「見え」そしてまた「考え」られているのである。ここで、この「見え」と「考え」とはてんでばらばらの二つの本箱把握ではない。それらは位置において一致し合致している。(大森 2015, p. 69 (傍点原著))

見えているコップも考えられているコップも様式こそ異なれど同じ一つの風景から生い立っているとするため、実物としてのコップが知覚像としてのコップを産出するという先ほどの二元論的な構図を大森は採らない。実物としてのコップも知覚像としてのコップも、同じ一つの立ち現れからそれぞれ抜き描きしたものにすぎず、ここに因果関係を見て取るこ

とは誤りなのである。「科学は知覚状況の『考え』的な部分的『抜き描き』であるにもかかわらず、それを知覚状況とは別種な何ものかの描写であると思わせる誘惑が非常に強い」としながらも、大森は科学的な描写を知覚状況から孤立させるべきではないと論じる。大森に言わせれば実物と像の剥離はこの誘惑に屈したことから生じた錯誤なのである。確かに、科学が孤立的事物のみを扱うのだとすれば、それは色や音に満ち溢れたこの世界とは没交渉の営みになってしまいかねないという大森の懸念は理解できる。しかし科学的描写による客観的世界とはもと「そういうもの」としてすなわち私が現に知覚しているこの色やこの音から隔絶された孤立物として考えざるをえないのではないか。知覚風景と言語描写との関係を考えるうえで、まずは文と命題の区別をつけておかねばならない。青山拓央は文と命題を区別して次のように述べる。

文はつねに、紙面のインクやデイスブレイ上の光点といった特定の物理的形態から成り、だれかがそれを見ない限り(音声表象であれば聞かない限り)、その真偽が問われることはない。だれにも読まれな(聞かれな)い文というのは、文ではなく、たんなる物質にすぎない。(青山 2022, p. 279)

青山によれば文は物理的形態を取って誰かに文として読まれて初めて文として存在しているのに対して、命題は読む者

も読まれる文も必要としていない。それゆえ命題は直接読まれることはなく、読まれているものは命題がインクの染みに「受肉」した文である。科学的描写を含めた言語もまた命題と同格の存在者と見なせる。私が実際に目にするのは物理的形態を持った文なのだが、その文を通して私はその命題的意味を知るのである。各々の水分子トークンとその配列のされ方を一つ一つ追跡してゆく場合「同じ」川に二度入ることができないように、物質的側面を伴う文は厳密な反復を許さないが、私は鸚鵡返しの中にいつでも同じ命題を見透かしている。だが、こうした鸚鵡返し可能な特性によって、命題は特定の文にだけ結びつくということが不可能になってしまっている。私は文を読んで命題に至ることはできるが、命題の側から特定の文に至ることはできないのだ。命題の中の「これ」という語は自分自身をその意味によって現実のこのこれに接地することができないのである。なぜならば、命題内の「これ」が、可能な言語行為のうち現実世界のこの言語行為の中で発せられた「これ」という音声のことであるという事実は当の命題内容には書き込めないからだ。

科学的描写を知覚状況からの「抜き描き」であるとする大森の抜き描き論は、命題と文の区別にまったく無頓着であるため、この区別を導入したうえで再度論じ直す必要がある。私は現実のコップについて運動方程式を立ててその運動を記述することはできるが、記述自身のうちに「この現実世界の記述である」ということが書き込まれているわけではない。命題である言語的意味を「重ね描き」するためには意味以外

の何かによってそれを特定の「文」に「受肉」させなければならぬのだ。大森の重ね描き論ではこの受肉を可能にする仕組みが論じられていないのである。

言うまでもないが、音という知覚される現象一般を「空気の振動」と言い換えるだけでは科学的描写を知覚風景に重ね描いたことにはならない。重ね描きとは今聞こえているこの音という特定の経験トークンに特定の概念をあてがうことでなければならず、ある経験タイプを科学的描写タイプにどう翻訳するかという問題ではないはずだからだ。また、大森は科学的描写を知覚風景に調和させることばかりに専心しているが、重ね描きの謎は何も科学的描写に限った話ではない。すでに見てきたように、大森の提起した重ね描き論は、ある概念を現実世界に当てはめるとはどのようにしてなされるかという言語哲学上の問題の一形態と捉え直すべきなのだ。もちろん、大森は科学的描写をも思ひ的な立ち現れであるとしてその言語性を否定しようとするかもしれない。しかし私は現に言語をこの現実に当てはめており、今知覚している赤いものを「赤い」と言い表している。そうした言語さえもすべて今この瞬間に生起している思いに還元されるのならば、私は「この知覚風景は客観的世界の局所的な見えである」という理解さえ形成できなくなるだろう。というのも、客観的世界とは、この知覚風景を言語で描写するときに言語が知覚風景とは同化せずそこから剝離することによって生じる副産物だからだ。この事実はどれだけ強調してもしすぎることはない。紙面上のインクのような知覚される内容とは異質な、鸚

鵲返し可能な言語によって知覚風景が記述されるとき、言語がその意味内容として喚起する客観的世界が、まさにその記述の対象であったはずの知覚風景から弾き出されて自立するのだ。客観的世界は直接見聞きすることはできず、あくまで意味的に把握されざるをえない抽象物なのだと言ってもよい。こうした事情のため、「赤さ」といういつでも鵲返し可能な概念を以てしてなぜ現実を感じられているこの赤さを描写できるのかという問いは、私の見聞きするものがなぜ客観的世界の一風景であるとも言えるのかという問いと同根なのである。予め結論を述べておくと、概念とは別に重ね描きされる「口を動かすこと[・]の自由」が媒介となつて初めて、「赤い」という概念はこの赤さを描写できるのだ。

今現に生じているこの知覚風景がただの立ち現れではなく、同時に客観的世界の局所的な実況中継にもなっているという世界把握を私たちは共有させられているが、それは現に立ち現れている知覚風景を鵲返し可能な言語によって描写することで、そこから端の今を欠いた客観的世界が生い立つからだ。目の前のコップは知覚的なコップでありかつ言語が打ち立てた客観的世界内のコップでもあり、私が目の前のコップを触るとき、客観的世界のほうでも入角という人物が物理的なコップに触れている。では、目の前の知覚的なコップに私が触れる瞬間と、客観的世界において入角が物理的なコップに触れる瞬間とはちょうど同時であると言えるのか。そもそもここにおける「同時」にはいかにして意味が与えられるのだろうか。青山は物理状態とそれに対応する意識

状態のずれが生じうるとして、次のように書いている。

私のある物理状態が、それに対応する意識状態を生み出すために途方もなく長い年月、たとえば1万年もの時間を要するとしたらどうだろうか。もし、こうした生成の遅れが現実起こっていたとしても、私の周囲の人々はもちろん、私自身でさえ、なにも気づかないのではないだろうか。(青山 2019, p. 130 (傍点原著))

青山の議論は鵲返し可能な概念によってこの知覚を「じかに」描写することの不可能性を論じたものとして読むことができる。引用箇所における青山の叙述は物理状態と意識状態とが1万年ずれた世界を想定しているが、そうした「1万年」が意味をなさないことこそがこの論点だろう。概念によって打ち立てられる物理状態とこの意識状態とは「ずれ」に意味を与えることすらできないほどに「ずれている」のだ。青山の提起した問題はこの意識状態を言語で「じかに」描くことの不条理さを暴露しており、その重ね掛けなさを極点にまで追い詰めたものこそがあらゆる知覚が生じているこの今なのだと言える。

時計の針はいつ見ても今を指している。なぜならば、すぐ後で述べるように時計の針は「今この文章は読まれている」という文と同種の必ず当たる予言だからだ。写真に撮られた時計には写真を見ている今がいつなのかを指す力がないことからわかる通り、時計の針が表示する「今」は概念として

の今であり、端的なこの今ではありえない。すなわち、時計そのものには端的なこの今がない。これは「地図そのものにはここがない」とこと類比的である。端的な今や端的なここは、あくまで時計や地図の外部から持ち込まれる他はない。観光案内などで「現在地」が記されている地図があるが、その「現在地」が時計の針に当たり、概念上の「現在地」を読み手に知らせるのだが、それはあくまで私が端的なここを地図上に投錨するための目印にすぎず、目印自身がこの現実世界を指し示しているわけではないのだ。時計の針もまたそれ自身は概念上の「端的な今」でしかありえず、それ自身がこの現実の今を指すということはない。時計の針を現実の端的な今と同一視するためには時計が今見られなければならないのだ。

時計は「今」という語の特殊性により針を今見ることで針が示す「今」を端的なこの今に受肉させることが可能だが、これは「今この針は見られている」という命題がその内容によって自分自身を針という物体に受肉させているわけではない。命題の側からは、その中のある時点を私がコップを知覚しているこの今に接地させられない。それができるならば、「今は西暦二千二十五年八月二十五日である」という文章はその意味内容自身によって正しい文になることができなければならないが、この文章が正しいかどうかは当然、当該文章がいつの時点で読まれたかに依存している。実際、この文は私がこの論文を書いている今日においては真である。だが、インクで書かれた「今は西暦二千二十五年八月二十五日であ

る」という文とは異なり、「今は西暦二千二十五年八月二十五日である」という命題自身は人目に触れることがそもそもありえないため、それがいつ真なのかという問い自体がそうした命題の集合の中では成り立たない。この命題が真であるためには、命題は私の目に触れられるようにインクの染みとして受肉していなければならないのだ。青山は「世界には今、少なくとも一人、日本語を読める人間がいる」という「予言」を行い、それに続けて次のように書いている。

日本語を読める者がいることは、この予言が読まれるための条件である。日本語を読める者が世界に一人もいなければ、予言が読まれることはない。このとき予言は命題として、は外れているが、しかし、そのことはけっして表面化しない。つまり、この予言は文として真偽が問われるときには、必ず当たる予言なのである。(青山 2022, p. 278 (傍点原著))

命題はインクの染みなどに受肉して文とならなければ私の目に触れることはない。時計は文のように受肉しているためにそれを今見ることによって今が何時何分かの「予言」が可能になっているのだが、時計の針はいつ見ても今を表すという点で必ず当たる予言の一種と見なせる。すなわち、時計の針は「今この文章（この針）は見られている」という命題をその内容として持つのである。この命題中の「今」はそれ自身では自己を知覚の場としてのこの今に接地できないが、イ

ンクの染みに受肉することによって私の目に触れることで、まさに端的なこの今であったと端的なこの今において見なされる。ただし、これを命題内の「今」が事後的に端的なこの今となった、と言うのは正確ではあるのだが危うい表現だろう。というのも、命題内の「今」と端的なこの今とのあいだには時間的な前後関係がないからである。とはいえ、こうした危うい表現でしか言い表せないような事態がまさに「今」と眩くときにはつねに起こっているのだとも言える。ではなぜ命題内の「今」が受肉先の時計の針やインクの染みにおいて読まれるとき、まさにそれを読んでいる端的なこの今を予言していたかのように扱われるのか。それは「今」という語がまさにそうした接点を事後的に可能にするかのような仕掛けを概念としてもとと内蔵しているからである。「今」という概念はそれが受肉先において目撃されるとき、もともとその目撃が予告されていたかのような意味を持つとされているのだ。なぜ「今」がそうした意味を内蔵できるのか、またその発動条件とはいかなるものかについては次節で論じよう。

第二節 録音のようにしか喋れない人

私が「私」と言うときは他ならぬこの私を指している。ここで、私の言った「私」という台詞を録音して後から聞き直したとしよう。録音したこと自体を忘れるほど時間が経過してから聞いた場合、私はその声を自分のものとは気づかないかもしれない。そのようにして聞かれた「私」という音声はその発言者自身を指すものでしかないため、ここでの「私」

はせいぜい「その人にとつてのその人」という意味しか持たない。また、その音声が人間の声を録音したものなのかどうか不確かな場合には、AIによる自動生成の可能性も考慮に入れて「私」は辞書の中の語としての「私」と受け取るのが適切だろう。

録音音声は私が「私」と言った瞬間には確かにあったはずの何かを失っている。では、一体録音によって何が失われたのだろうか。実を言えば、このとき失われたものこそが「これ」という語をこのこれに接点する当のものなのである。それは他でもない、その「私」という発語が世界で唯一「現実」に動かせる口を動かして言った「私」だったという事実である。言語には、現実に関与する口から発せられたものとそうでない口から発せられたものがある。前者は紛れもなく私の言語であり後者は他人もしくは自動人形の言語である。あるいは、「現実に関与する口」ではないという点では他人も自動人形も同じであるため、他人とは「最初から録音のようにしか喋れない人」だとも言える。他人がもともと録音のようにしか喋れない一方で、他ならぬこの私だけは現実に関与する口を動かして喋っている。聞き取られる言語のうちだけが私の台詞かを聞き分けるには、それが現に口を動かして発せられたかどうかによつてのみ判断されているのである。ここで「現実に関与する口を動かしている」というときの自由は、この知覚風景に重ね描きされたものである。というのも、この口を選び出す（動かし）の事実が「口を動かした感じ」という単なる知覚には還元されえないからだ。もしも（動かし）の事実が知

覚の一部であるならば、私が自分の台詞を選び出すという作業はある一部の知覚内容に即して別の部分の知覚内容を取り出しているにすぎない。しかし〈動かし〉によって選び出された私の台詞は、まさにこの知覚内容を描写できるものでなければならぬ。すなわち、私が口を動かして「これ」と言ったとき、今まさに私が知覚しているこのこれを指さなければならぬのである。言語とは今のこの思いに於てがわれるものだが、一方でこの思いに吸収され尽くしてしまっている思いを描出したことにはならない。大森もまた「自由な行為が物理学の言語と『重ね描き』される⁽³⁾」と書いているが、自由の重ね描きによって言語の重ね描きが初めて可能となる点を論じ切れていない。これまで縷々述べたように言語はそれ自身を端的なこの今に接地させられないために、こちらの側から言語へと現実性を投錨してやる必要がある、そのためには知覚風景の上に自由が重ね描きされていなければならぬのである。では、「現実⁽⁴⁾に動かせる口」を〈動かし〉自由の重ね描きによってなぜ「赤さ」という概念はこの赤さに接地できるようになるのか⁽⁴⁾。

すでに述べた通り、「私」という語はまさに「現実⁽⁴⁾に動かせる口」やそれを〈動かし〉ている主体を指す語であると考えられるにもかかわらず、私が吹き込んだ「私」という音声にはその発信源が「現実⁽⁴⁾に動かせる口」であるという事実を書き込めない。別言すれば、言語にはその発信源が「現実⁽⁴⁾に動かせる口」であることを立証する能力がない。言語が聞き取られる際にはそれが「現実⁽⁴⁾に動かせる口」から発せられた

という事実をつねに喪失しているのだが、だからこそ「私」という語を録音して聞き直したとき、その喪失がより際立つのだ。言語が聞き取られる際に起こる「現実⁽⁴⁾に動かせる口」の喪失が顕著となるのは「今」や「これ」という語についても同様である。私がこの今を捉えて「今」と言うとき「今！」と口を動かして言う。今とはあらゆる知覚の生起する場であるにもかかわらず、「今」という文字だけを表示し続けるモニターをただ見ているだけでは駄目で、これを今だと捉えるためには「今！」と考えたり口を動かして言ったりしなければならぬ。

これが今だと知るために「今、今、今」とその都度私が口を動かして言うのも面倒なので私が「今」と言った音声をテープに吹き込んで繰り返し再生したとする。録音音声はそれが「現実⁽⁴⁾に動かせる口」から言われたという事実を喪失しているので、この状況は他人が「今、今、今」と言っているのを知らせてくるのを横で聞いているのとまったく等しい。このとき聞く「今」はあくまで知覚の対象でしかなく、単なる音声と変わりが無い。もちろん概念としての「今」をただ聞いている、ということも可能ではあるのだが、ただ聞かれるだけではその「今」概念は現実のこの今に接地されることがない。「今」という語を概念として捉え、その概念上の「今」を現実のこの今に接地させるためには、現実⁽⁴⁾にこの口を〈動かし〉てその概念を発しなくてはならない。口を動かすことの自由が一方では「動かせる感じ」として知覚され、また一方では言語行為として「今」という概念と関係するのである。なぜ

「動かし」が概念と関係するのと言え、言語は口を（動かし）て言うものであるという思いなしがそうさせるからだ。自分の口から発せられた「今」という語は私が口を（動かし）て言った概念として認識されるのである。そのような認識がなければ、私はこの口から出た音声を自分自身が意図的に言った台詞として捉えることができないのだ。あらゆる知覚の生起する場であるこれを今と捉えるためには「今」という音声がただ聞き取られるだけではなく考えたり言ったりされなければならぬが、それは概念が（動かし）の自由によって媒介されて初めて「動かししている感じ」を通してこの知覚風景に接地されるからである。

私が目の前に見えている何かを指して言った「これ」という台詞も、録音してから聞き直せば、その発信源が「現実」に動かせる口であったという事実は聞き取られない。そこで録音の中の「これ」は発話者にとつての「これ」や単なる語としての「これ」として聞き取るほかない。しかしそうであるならば、私の言う「これ」という語自身は発話時点ですでにしてその語によって指そうとしていたものを語れていなかったのだと言える。にもかかわらず私の言う「これ」や「この赤さ」といった発話がこれやこの赤さを指しているのは、「これ」や「この赤さ」といった概念が、それを現実に口を（動かし）て言ったという事実によって知覚風景上のこれやこの赤さに重ね描きされるからである。（動かし）の自由が概念とこの知覚とを結びつけるのだ。大森は科学的描写を知覚風景に対してじかに重ね描きできるかのように論じているよう

に見えるが、実際には科学的描写を含む言語的な描写を知覚風景に重ね描くためには、それとは別に重ね描きされた自由を媒介する必要があるのである。

ところで、私が私の台詞を聞き分けるとき、私は「現実に動かせる口」によってそれを選び出すのだが、その判断は決して誤りえないもののだろうか。通常、私は口を動かしただけと同時に自分自身の声を聞いているのだが、私が実際に口を（動かし）た瞬間は、私が「口を動かしただけ」を知覚したり、自分の声が聞こえたりする瞬間よりも以前である。もちろん（動かし）の自由は知覚風景に重ね描きされているにすぎないため、実際に口を動かしただけの瞬間とは前後関係を持つことすらできないとも言えるのだが、「自由」の意味上、実際に動かしただけの瞬間は動かしただけを知覚するよりも以前でなければならぬ。そうであるならば、私自身は自分の台詞を聞き分けていると思っても、実際には「動かしただけ」から近接して起こる音声を自分の声だと思っているだけのことであり、「動かしただけ」がしてから十年経ってからやっと自分の声が聞こえるような状況においては、私はどれが自分の台詞だったのかを聞き分けられなくなるかもしれない。これは自分の声を録音して長時間が経過してからその音声を聞いたときに自分の声かどうかがわからなくなるといった先の例で論じた通りである。他人とは違って私だけは現実に口を動かしただけという言語における自他の区別の実態は、口を動かしただけに引き続いてその動かしただけに即した言

語が聞き取られるという経験に由来する心の習慣にすぎないのである。

そのため、言語として聞き取られる音声の中で特定の音声だけを私の台詞として「現実」に動かせる唯一の「口」に帰属させることには根拠がない。(動かし)の自由は重ね描きの産物であるからそもそも帰属先である「動かせる口」が実在しないとも言えるのだが、その点を措くにしても「動かせる感じ」と「聞き取られる音声」とのあいだには何の結びつきも実在しない⁽⁵⁾。録音の例からもわかる通り、言語は自分自身を台詞としてこの私に帰属させる力を持たないからである。それにもかかわらず、「この台詞は現実」に動かせる口から言われている」と言えるようになることが言語使用者には求められている。もちろん、「この台詞は現実」に動かせる口から言われている」という文言は(その意味に反して)それ自身を自由の主体としての私に帰属させることはできないのだが、だからこそ「この台詞は現実」に動かせる口から言われている」といつでも表明しうる言語の条件をなしており、この要請に従って重ね描きされる(動かし)の自由によって「これ」という概念はこのこれに接地され、この「思い」を私の台詞として語れるようになるのである。

なお、今現に立ち現れている知覚風景は、それであると同時に客観的世界の見えの一実況中継でもあるという把握がなされているが、こうした把握は(自由の重ね描きを媒介にした)知覚風景への概念の重ね描きによって得られる。というのも、今現に知覚されているコップが「コップ」という概念

によって描写されるとき、それ自身で自立する客観的世界が成立するからだ。私は今知覚しているコップを客観的世界におけるコップでもあると通常は見なしており、この知覚は客観的世界の局所的な実況中継だと捉えられているのだが、こうした通常の世界把握においてはすでに自由と言語の重ね描きが働いていると言えるのである。

第三節 カブトムシを箱に閉じ込める

今立ち現れている知覚風景の中で、現に動かせるものと動かせないものがある。現に動かせるものとはすぐ目の前に見えている手足、すなわち私の身体である。目の前の手足を自由に動かせるのは一見当たり前の事実のように思われるが、これは実は矛盾と呼ぶべき事態である。というのも、何かを(動かす)という事実は「動かしている感じ」という知覚内容には還元されないものであり、それゆえ自由に(動かし)ている手足がこの知覚風景の中に映り込むことはありえないからだ。なぜ何かを動かすということが「動かしている感じ」に尽きないものなのか。それは次のようにして示される。

知覚風景をスクリーンに映る映像内容だと考えることにしたとき、現に感じられる一切のものはこのスクリーン上に映じる。現に今見えている私の身体と呼ばれるものもこのスクリーン上の映像内容の一部であり、現に今感じられている痛みもまた映像内容である。このとき、感じられている様々なものの中で、なぜ目の前に映り込んでいる手足の映像を殊更「私の身体」と呼ぶのだろうか。それはこの手足が叩かれる

ときだけ現に痛みを感じるからではない。見えている手足も、感じられる痛みもともにスクリーンの映像内容であるため、痛みによって特定の身体を「私」として選び出すというのは、ある一部の映像内容によって、それを担う超越者を映像内容全体の中から探し出すことだからだ。だが、水で水を掬うことはできないように、映像内容から別の映像内容を、それらを超出したものとして選び出すことはできない。見えている手足も感じられる痛みも知覚されるものという点ではどちらも対等なのだ。そこで、今見えているこの手足をスクリーン上の映像内容の中から選び出すとき、知覚されるものとは別種の何かが必要である。それこそが「現に動かせる」という自由の事実だ。スクリーンに映じている様々な映像内容の中で、なぜかこの身体だけが現に自由に動かせる。手足は見えたり感じたりする知覚的な手足であると同時に「動かせる」手足でもあり、私とはこの「動かし」の事実によって選び出されたもののことなのだ。言うまでもないが、私を選び出す「動かし」の事実は単なる「動かしている感じ」を超出したものでなければならぬ。でなければ動かすことによる特定の手足の選び出しは水で水を掬うような不可能な作業になってしまうだろう。この身体を動かせるという自由は単に見たり聞いたり感じたりされるようなものではなく、それにもかかわらず知覚スクリーン上に重ね描かれる孤立物なのである。私とは知覚される映像内容の中から「動かし」の事実によって選び出された身体のことを原義的には指すのだが、そこから更に驚異的な事件が起こる。スクリーンの映像内容のごく

一部を占めるにすぎなかった私の身体は、なんとそうした映像内容を映し出すスクリーンそのものでもあるように見なされるのだ。すなわち、「それしかない」ものであったはずのこの知覚風景は、「動かし」の事実を梃子にして、あくまで入角という一人の人物から見えている一風景に格下げされるのである。これは、知覚風景の中にその知覚風景を見ている当人の身体の一部が映り込んでいるという異常な事態である。なぜこのような不可解な世界把握がなされているのかと言えば、知覚風景の裏で働く自由意志にその知覚風景を担わせているからに他ならない。私という人物は「動かし」の自由によって選び出され、しかるのちにその人物に知覚風景が「当人からの見え」として担わされるのであって、その逆ではない⁶⁾。意識や知覚と呼ばれるものは「それしかない」がゆえに、この順番が逆転することはありえない。「現実にはありとした赤色が見えているのは私だけだ」という現象的意識のそれしかなさが表明されているときにはすでに、私は自分がその口を「動かし」ていることを前提にしているのだ。したがって私は原義的には「思う」私ではなく「動かせる」私である。大森の立ち現れ一元論は知覚風景に重ね描きされた自由を取り払って「思い」や「知覚」を私から解放したものだとも言えよう。

知覚風景に「動かし」の自由をまづは重ね描き、そののちに重ね描きの「地」であったはずの知覚風景を動かせるその身体に担わせたものが私である。私とは原義的には「動かす」私なのであって、知覚する私なのではない。「現実には痛いの

は私だけだ」という感覚の現実性を訴えるときでさえ、「痛い」と口がただ動いているのではなく、私がこの口を〈動かし〉ているという事実が前提されており、私を他の知覚される内容から選り出しているもの、すなわち私を私たらしめている当のものはこの〈動かし〉の事実にはならない。「現実には痛いのは私だけだ」という独我論的事実の表明が言語の条件であったが⁽⁷⁾、独我論表明においてなされているのは「現実には痛いのは私だけだ」という感覚の「それしかなさ」の訴えが現実には口を〈動かし〉て言われているという事実の承認なのである⁽⁸⁾。すなわち、言語の条件としての独我論表明は、思いを語るこの私が「知覚風景に重ね描きされた自由への知覚風景の担わせ」によって成立しているという事実を承認し続けることだと言換えることもできる。それは、この台詞が現実に関与する唯一の口によって語られていることと、その台詞によってそれしかない思いを語れていることの同時承認である。私は「この台詞を口を〈動かし〉て言っているのは私である」ということと、そうした台詞によって私が語れていることを同時に認めなければならぬのである。もちろん「この台詞は現実に関与する口から言われている」という文言自体には、それ自身を「現実に関与する口」に帰属させる力はない。「この台詞は現実に関与する口から言われている」という文言はそのような事実の文字通りの実在を証明できない。そもそも「現実に関与する口」といったものは自由の重ね描きの産物に他ならず、したがってそこに帰属されるべき「私の台詞」もまた実在しないのだ。しかし私は言語

使用者として、重ね描きの矛盾を取って肯定し、今読まれているこの文章が私の台詞であること、そのような私が実在することをもここに認めなければならない。

参考文献

- 青山拓央 (2019) 「客観的現在と心身相関の同時性」、森田邦久 編著『〈現在〉とこう謎』、勁草書房、pp. 129-142
 青山拓央 (2022) 「命題と《現実》」、永井均・入不二基義・上野修・青山拓央『〈私〉の哲学を哲学する』、春秋社、pp. 277-298
 入角晃太郎 (2023) 「言語の超越論的条件としての独我論表明」、『人間存在論』第29号、pp. 65-78
 大森荘蔵 (2015) 『物と心』、ちくま学芸文庫
 大森荘蔵 (2021) 『新視覚新論』、講談社学術文庫
 永井均 (2016) 『存在と時間 哲学探究1』、文藝春秋
 野矢茂樹 (2016) 『心という難問』、講談社

【註】

- (1) 野矢茂樹は実物と知覚像の二元論を採ることの困難を論じるに際して、ここで述べたテレビの例とともに夢を引き合いに出している(野矢 2016, pp. 20-5)。
 (2) 大森 2015, p. 72
 (3) 大森 2021, p. 275 (傍点原著)
 (4) 本稿の「現実に関与する口」は永井均の「その目からだけ現実には世界が見えており、その体だけが殴られると現実には痛く、その人の悲しみだけが現実には直接的に悲しい唯一の

存在者（永井 2016, p. 47（傍点原著））である「現実」に唯一の原点」に因んでいる。ただし、本稿と永井とでは現実性の捉え方が異なる点には注意されたい。

(5) 言語を単なる音声やインクの染みに尽きない「概念（言表内容）」として捉えて「言語もまた知覚風景に重ね描きされたものだ」と捉える本稿に対して、大森の「声振り」論（大森 2015）において言語は音声やインクの染みに尽きっていると考えられているようである。ただしその場合、大森が重ね描きしようとしていた科学的描写とは一体どのような存在なのかはわからなくなる。こうした混乱もひとえに文と命題の区別に対する大森の無頓着に端を発している。

(6) 永井の独在論においては動かせる身体の唯一性と現に感じられる感覚の「それしかなさ」の区別に無頓着だが、〈動かし〉を単なる知覚と区別しなければ〈私〉もそれと同格の他者も作り出せない。本稿で見た通り、私の成立には〈動かし〉によって特定身体を選び出したのちにその身体へ現象的意識を担わせるという手順を踏むため、〈私〉を他の「私」たちから区別しているものを「無内包の現実性」の一言で片付けるのは適切ではない。

(7) この主張は入角（2023）で述べている。

(8) 他人とは唯一であるはずの〈動かし〉の自由をこれ以外にも認め、それら毎にそこからの「見え」があるということによって構成される。私は他者と同じ客観的世界に共存しながらそれを別々の視点から眺めていることにされているが、こうした他者なる存在の案出には言語の条件として要求される自由の重ね描きに加えて更なる矛盾を幾重にも付加せねばならず、本稿の扱うべき範囲から逸脱する。